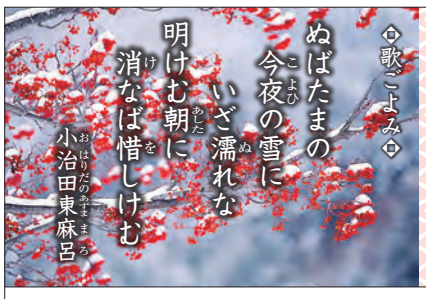

皇學館

学園報 第53号　発行・編集／学校法人皇學館 企画部
TEL：0596-22-6496・8600

●大　学　大学院・専攻科・文学部・教育学部・現代日本社会学部
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704
TEL：0596-22-0201（代表）　FAX：0596-27-1704

●高等学校・中学校　三重県伊勢市楠部町138
［高 校］〒516-8577　TEL：0596-22-0205（代表）
［中 学］〒516-8588　TEL：0596-23-1398（代表）

■注目記事
1面
「伊勢志摩定住自立圏共生学」を開講
2面
猿田彦神社の「本殿遷座祭」に4年神道学科学生が奉仕
3面
部活動の朗報続々
4・5面
学園祭レポート
6面（高校・中学校）
有志生徒が清掃ボランティア3名が優良生徒表彰 ほか
7面
地域に根付け、レクぴよ活動
8面
英国・ケント大学夏季短期留学参加者インタビュー
■連載
4面
研究室探訪 Vol.22
川村一代ゼミ（コミュニケーション学科）
8面
皇學館ミュージアム
役者絵 中村芝翫 舌出し三番叟

文部科学省 地（知）の拠点

「伊勢志摩定住自立圏共生学」を開講

学官産協働で人材育成プログラムを開発

学園報第五十一号で既報の通り、本学の〈『伊勢志摩定住自立圏共生学』教育プログラムによる地域人材育成事業〉が平成二十六年度文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）に採択され、文科系大学のユニークな挑戦として全国的にも注目を集めている。現在、平成二十七年度の授業開始に向けて準備が本格化。十一月十五日には第一回COC外部評価委員会が開催された。

外部評価委員からはそれぞれの大学の取組みを踏まえた実践的な意見が寄せられ、将来に向けた課題発見につながった

地域の課題を〝教材〟に授業で解決法を模索

〈『伊勢志摩定住自立圏共生学』教育プログラム――業〉では、伊勢志摩圏域による地域人材育成事の三市五町（伊勢市、鳥羽市、志摩市、玉城町、度会町、大紀町、南伊勢町、明和町）が参画する「伊勢志摩定住自立圏共生ビジョン」で示された〈活力あふれる地域の形成〉等の圏域がめざす将来像の実現に向け、総合学修プログラム「伊勢志摩定住自立圏共生学」（四科目）を開発する（下図参照）。

本プログラムで学生は人口減少や少子高齢化といった問題を教材に主体的に圏域の現状や課題を学び、その中で自治体職員や職業人と協働しながら圏域の歴史文化、自然環境、地域経済・産業など地域資源を活かした解決法を模索。さらに、新事業創出（六次産業化）の方法等について学修できる新たな教育課程の構築をめざす。

現在、平成二十七年四月からの開講に向け準備が本格化。シラバス（授業計画）やホームページ、社会人受講生募集要項の作成などを急ぐほか、これらの学びを支える体制づくりを急ピッチで推し進めているところだ。

文科系大学と地域のモデル事業として期待

十一月十五日には岩手大学の丸山仁副学長、四日市大学の岩崎恭典副学長、岐阜大学大学院教育学研究科の益川浩一准教授の三名を外部評価委員に迎え、学外の公正な視点で事業の進捗を評価する第一回外部評価委員会を開催した。

はじめに本学の齋藤平COC実施副本部長が「一般的に文科系大学が自治体と連携した教育を行う場合、教員の派遣が中心で、本学のように大学と地域が一緒にアイデアを出しながら課題解決に取り組むケースは珍しい。その意味で本事業は全国の文科系大学のモデル事業として注目を集めている」と説明した後、「伊勢志摩定住自立圏共生学運営会議」の開催や「地域課題学修支援室」の開設、圏域内の視察など事業の進捗状況を報告。外部評価委員からは、当事業に対する期待とともに、各市町の地域教育の拠点であるCLL（コミュニティラーニングラボ）設置の考え方や、事業の評価に対する具体的な基準の有無、三重県の南部地域活性化局との連携などに関する質問が寄せられ、活発な議論が展開された。

会議に参加した伊勢市情報戦略局企画調整課の辻浩利課長は「伊勢志摩の強さは日本を代表する観光・文化資源である神宮の存在と、その神宮に根ざした教育を展開する皇學館大学の存在。学生はその意義を存分に理解し、若者らしい視点で当圏域の魅力を再発見し、広く圏内外に発信する存在となってほしい」と本学への期待を語った。

地域志向大学としてアクティブ・シチズンを育成

〈地域貢献〉を使命の一つに掲げる本学としては本事業で開発した「伊勢志摩定住自立圏共生学」を学部横断的な副専攻プログラムとして教育課程の中に位置づけることで、地域志向の大学としての教育改革・ガバナンス改革を推進する。このことにより学生は所属する各学部の専門科目を学びつつ、地域の課題を自らの問題と捉え行動できるアクティブ・シチズンとして、ひいては卒業後も地域の将来を担う人材として成長し、地域産業界・行政機関・教育界等で活躍することが期待できよう。

地域再生・活性化の糸口となるか、本学のみならず圏域すべての市町にとっても、来春の開講が大いに待たれている。

清水 潔 学長が再任

十月二十九日に開催された学校法人皇學館理事会において清水潔学長の再任が決定された。清水学長は平成二十三年四月一日に学長に就任し現在一期目。二期目の任期は平成二十七年四月一日から同二十九年三月三十一日までの二年間。

文科省 私大支援事業に2件採択

文部科学省が推進する「私立大学等改革総合支援事業」及び「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」において、平成二十六年度は本学の二つの取組みが採択された。

近年、一方通行の講義ではなく、学生が主体的に考え、他者と協業して課題解決を行う力を育成する「アクティブ・ラーニング」への転換が求められている。しかしこうした学修スタイルの実現には、学生が授業前に必要な知識を修得し、あるいは授業後に学修内容の定着を行う「反転学修」が不可欠であるが、人的リソースの少ない小規模大学が取り組むための足枷になっていた。

本事業の採択により、本学は反転学修に必要なコンテンツ作成を支援する「メディアデポ」を導入予定。これは既存の講義スライドをコンピュータの合成音声で読み上げるシステムで、大掛かりな音声・映像機器や高速回線がなくても反転学修コンテンツが容易に作成可能となる。これにより、学生・教員ともにアクティブ・ラーニングの大幅な利用促進が期待できる。

タイプ1 教育の質的転換
反転学修を容易にするメディアシステムを導入

タイプ2 地域発展
地域の生涯学習の場としての設備を拡充

平成元年に開設された佐川記念神道博物館は、神道関連の貴重な資料を収蔵・展示する本学の附置施設であり、これまで日本の伝統文化と神道に関する情報発信、本学学生や地域における生涯学習教育を担ってきた。今回の事業採択により、地域の人々が生涯教育の場としてより活発に活用できる施設への転換を進める。具体的には既存の講義室の映像・音響機器の高度化、机・椅子などの設備の可動化を進め、講義やプレゼンテーション、グループ学修、各種実習などの多様な学修スタイルへの対応を可能とする。これにより、本学の学生はもちろん、地域の人々や企業、団体などが気軽に訪れ、同時に本学の「知」に触れる開かれた施設として活用されることをめざす。

倉田山春秋

年末が近づいてきた。この時期になると年賀状の準備をしなければ、と思うのは一定以上の年齢層の人たちである▼情報通信技術の発達で、若年層を中心に、郵便による年賀状ではなく、メールやソーシャルメディアサービスを使った新年の挨拶が多くなってきている▼それに加え、個人情報保護法によって同級生たちとの住所の交換もできない環境にある。年賀状をちょっとした恋文に仕立てた世代としては少し寂しいと思う▼郵便物そのものも年々減少を続け、平成十二年と二十三年の総数を比べると四十一億六千万通の減となっている（総務省統計局）▼郵便を使う機会が減っていることを痛感させられる出来事があった▼事務局の窓口で学生に自分宛の返信用封筒を書かせようとしたところ、封筒の表裏が分からない、どう住所を書いたらいいかわからないという相談を受けたそうだ▼これを受けて、本年度スタートした共通科目・日本語表現では封筒の書き方をプログラムに含めて指導している▼しかし、使わないことを習っても定着は難しい。実践の機会として、せめて年賀状だけでも、と思う年の暮れである。

猿田彦神社の「本殿遷座祭」に4年神道学科学生が奉仕

文学部神道学科助教　木村徳宏

平成二十六年十月二十四日に伊勢市・猿田彦神社にて「本殿遷座祭」が斎行され、本学神道学科四年の学生十四名が祭員として奉仕した。

伊勢市宇治浦田に鎮座する猿田彦神社の本殿改修工事がこのたび竣功し、十月二十四日に、御霊代を仮殿から本殿へお遷しする「本殿遷座祭」が斎行された。

猿田彦神社の「さだひこ造り」と呼ばれる現本殿は、昭和十一年に建築されたもので、前回のご修造より二十年が経過。修復が必要な箇所が散見され、耐震面での補強も必要となったため、本年二月から本殿・祝詞殿・拝殿の造営工事が進められていた。

この遷座祭には、同社の宇治土公貞尚宮司からの依頼に基づき、本学から文学部神道学科の安江和宣教授・木村徳宏助教が「祭儀指導」を行い、四年神道学科の学生十四名が「執物奉仕員（遷御の御列にて威儀物を捧げ持つ所役）」として祭典に奉仕。この他にも、参列者の受付・応接業務に十名の学生が奉仕した。本殿遷座祭は滅多に行われることのない複雑な祭祀のため、「儀註」といわれる詳細な注解資料が必要で、この作成を安江教授が監修、神職を含む学生の実地指導に木村助教が当たった。

前日の「川原大祓」から参列した学生は、引き続き「習礼」と呼ばれる予行演習に参加。神妙な面持ちで、繰り返し練習を重ねていた。当日の昼間にも神職の方と共に、再び「習礼」を行って万端を期し、午後七時ちょうど、浄闇の中、二十年ぶりの厳儀が斎行された。

遷座祭では、遷御の列次を整えるため、「召立の儀」が行われる。捧持する威儀物（神宝）と名前が読み上げられると、称唯といわれる「オー」という声を出し、これに応じる。奉仕の学生は「御胡籙」「御弓」などの神宝を捧持、宮司以下神職約七十名の列に加わった。雅楽と警蹕の「オー」という声が響く中、絹垣で囲まれた「御」を中心に、御列が粛々と進む。「雨儀廊」という屋根付きの回廊を渡り、約百五十メートル離れた本殿へ。本殿の内陣に入御されると明かりが灯され、再び「召立の儀」を行って威儀物が外陣に納められる。宮司の祝詞奏上に続き、宮司・参列者らが拝礼し、祭儀は無事滞りなく終了した。

このような貴重な機会に祭員として奉仕することができた学生たちは、「緊張しましたが、たいへん有り難い経験をさせていただきました。来春の奉職を控え、身の引き締まる思いがしました」と、感想を述べていた。

木村助教の指導のもと行われた「習礼」の様子

奉仕した14名の学生たち

熊野古道世界遺産登録十周年記念
「第二回 花の窟 錦の御幡献上行列」に協力

去る十月十九日、爽やかな秋晴れのもと、熊野市有馬町の花の窟神社周辺にて「第二回 花の窟 錦の御幡献上行列」が開催された。後援した本学からは神道学科の河野訓教授が学長代理で参列。ほか、同学科の木村徳宏助教による現地指導に基づき、雅楽部・祭式研究部の部員十八名が参加者の装束着付け・道楽（行列道中の雅楽演奏）・行列の各所役・行事の進行係として協力した。

『日本書紀』にイザナミノミコトを葬ったと記される「花の窟」から掛けられた綱に吊るされた三本の幡を「三流の幡」という。江戸時代後期の地誌『紀伊続風土記』によると、花の窟神社の祭の日には、毎年朝廷から「錦の御幡」が献上されていたが、ある年、熊野川の洪水によって途絶えてしまったため、代わりに地元の人々が縄で編んだ「三流の幡」を飾るようになったという。今回の「花の窟 錦の御幡献上行列」は、花の窟に「錦の御幡」が献上される様子を華やかな平安行列を通じて現代に再現しようとするもので、平成二十四年に続く二回目の開催となった。

行事は、イザナミノミコトが火の神カグツチノカミを産んだと伝承される産田神社前での「進発の儀」に始まり、イザナミノミコト役・献上の勅使代役・花の姫役を中心とする「神々宿る花の窟の列」「錦の御幡献上の列」「花の姫の列」と続く百名近い行列が、大勢の見物客が見守る中、雅楽の音色とともに優雅に進んだ。そして、花の窟神社を背後に臨む七里御浜海岸の特設舞台にて「錦の御幡献上の儀」が盛大に執り行われた。

皇學館の原点に触れる
参拝見学・山室山参拝

十一月五日に参拝見学・山室山参拝が行われ、全学部及び専攻科の学生と教職員が参加。神宮や本学ゆかりの地を巡り、改めて建学の精神や先人に思いを馳せた。以下に学生の感想を掲げる。

座学では得られない学び

教育学科四年　伊藤友宏

私はこの四年間で皇學館大学でしか体験できないさまざまな経験をしました。中でも参拝見学では本学ゆかりの地である寺社や博物館等を訪ね、皇學館大学生の一員であることを確認したり、大学やそれに関するたくさんの知識を得ることができたと思います。実際に見たり聴いたりすることで、座学では得られない学ぶ喜びを感じることができました。また、参拝時に「二礼二拍手一礼」という作法を実際に行うことによって日本人としての伝統と心を受け継ぐことができたと思います。

私は岐阜県出身ということもあり、三重県という地域についてまったく知りませんでしたが、この参拝見学を通して三重県という地域の特性を学ぶことができました。この学びを、来年教壇に立って授業をする際に生かしていきたいです。また、三重県の偉人や歴史、特産物などについて知るきっかけになったので、岐阜県に戻った際にも子どもたちに実際に見たり聴いたりすることの素晴らしさや地元地域について知る大切さを伝えていきたいと思います。

三重県総合博物館にて

〝工夫の歴史〟を間近に見る

国文学科三年　伊藤遼

今回の参拝見学は鳥羽志摩方面でした。最初に訪れたのは伊勢志摩スカイラインを上っていった先にある金剛證寺です。このお寺は古くから神宮の鬼門を守る寺として知られ、多くの人が参詣してきました。御本尊は文字どおり金色に輝いており、名前に負けない迫力でした。奥へ進むとたくさんの卒塔婆が立てられていました。古くから山は死者の霊が集まるとされていて、金剛證寺ではそういった死者の供養のために多くの卒塔婆を立てているそうです。

次に向かった先は「海の博物館」という伊勢鳥羽志摩の海での暮らしぶりが学べる場所です。館内には漁に使う網や仕掛けが展示されており、道具の仕組みや海女さんについてなど漁業に関する多くのことが学べました。中でも印象に残ったのは木造船の収蔵庫です。八十隻近い大小さまざまな形の船が収められている様子は圧巻でした。漁業がこの地域を支えているのは、今も昔も変わりません。昔の人たちが積み重ねてきた工夫の歴史を間近に見ることで漁業がこれからも受け継がれ、続けられるべきものだと再認識できました。

おかげ様の心を忘れぬように

専攻科　竹内千里

たなつもの百の木草もあまてらす日の大神のめぐみえてこそ

朝よひに物くふごとに豊受の神のめぐみを思へ世の人

この二首は『玉鉾百首』に収められている本居宣長大人の歌です。私たち専攻科生にとっては、実習中の毎食事の前と後に詠う歌として大変馴染みのあるものです。日々変わることなく食事が頂けることは、偏に大神様の恵みのお陰であり、そのことを食事の度に思い起こして感謝をしましょうという意味です。

今私が学問の道に励むことができるのも、宣長大人を初めとする先人たちのたゆまぬ努力があったからです。何気ない出来事も、変わらない一日も、思い返せば誰かの支えによって成り立っているということはよくあることです。おかげ様の心を忘れず、自身もまた、何か人のため、世のために尽くすことができればと思います。

山室山の険しい道を一歩一歩登りながら、厳しい学問の道を登られた宣長大人に思いを馳せた一日となりました。

山室山で宣長大人の奥墓を参拝

各学年の参拝・見学先

一年	山室山、斎宮跡・斎宮歴史博物館、本居宣長記念館
二年	滝原宮、丹生神社・神宮寺（丹生大師）
三年	伊雑宮、海の博物館、金剛證寺
四年	結城神社、三重県総合博物館
専攻科	神麻続機殿神社、山室山、斎宮歴史博物館

部活動の朗報続々

日頃の練習の成果が実り、各部から嬉しい報せが続々と届いた

創部初！東海リーグ一部昇格

排球部女子

十月二十六日に行われた東海バレーボール大会秋季リーグ戦女子二部（会場・愛知学院大学体育館）の最終戦において本学排球部が椙山女学園大学に勝利。結果、二部準優勝となり、東海リーグ一部昇格を果たした。なお優勝は愛知教育大学であった。東海一部リーグは来年、現在の六チームから八チームになることから、二部の優勝チームと準優勝チームは自動的に昇格となる。

二部とはいえ強豪のバレーボールチームがいくつも存在する中、本学と愛知教育大学、岐阜経済大学の三チームが優勝争いに残り、本学は優勝チームに一対三で敗れたのみで、六勝一敗と堂々の準優勝であった。身長の高い選手がいないながらも、拾いまくってテンポの速いバレーで攻撃につないでいくバレースタイルで勝利をもぎとった。

排球部（男子・女子）は昭和三十七年の本学再興の年に創部された最も歴史のあるクラブの一つだが、その長い歴史のなかでも東海一部昇格は初めてで、まさしく快挙といえよう。現在二部四位の男子にも一層の奮起が望まれる。

十月二十七日、キャプテンの中条美穂さん（教育学部三年）と副キャプテンの岡田瑞穂さん（同）は学長室に清水潔学長を訪問し、一部昇格を報告した。現在、三重県学生バレーボール連盟の会長を務める清水学長は、「本学にとって大変な名誉であるばかりでなく三重県のバレーボールの発展にとっても大きな貢献です」と選手を称えた。中条さんは「一部に昇格しても、より上位をめざして頑張ります」と抱負を熱く語った。今後は一部常連校となるよう、さらなる強化と活躍が期待されている。

清水学長に東海リーグ一部昇格を報告する排球部部長の田浦教授（右端）と岡田さん（右から２人目）、中条さん

初出場で強豪相手に善戦

柔道部

本学柔道部が全日本学生柔道体重別団体優勝大会に初出場！　十月二十五日、二十六日にベイコム総合体育館（兵庫県尼崎市）で行われた同大会に臨んだ。

団体戦である同大会は60kg級から100kg超級の階級ごとにメンバー一人を選出してチームを構成し、七人対七人で勝敗を競う。初戦の相手は慶應義塾大学で、結果は二対三と惜しくも敗退となったが、東京の強豪大学相手に善戦した。

佐藤武尊監督は「勝って学ぶことも当然あるが、負けて学ぶこの方が多い。初参戦となった今大会では我々の持つ力を十二分に発揮し、全国にアピールすることができた。これからも直向きに前向きに頑張ることが大切」と大会を振り返り、「今後もチーム全体がさらにレベルアップできるよう指導に励み、部員一人ひとりがステップアップしていけるよう精進あるのみ。そして、応援してくださるすべての人に感謝しながら、着実に前に進まなくてはいけない」と話した。なお、出場選手は表の通り。

〝皇學館大学〟の名を広めるべく、初の全国大会に臨んだ部員たち

60kg級	
髙橋章人	国文学科４年
中島直紀	コミュニケーション学科１年
66kg級	
稲田達哉	教育学科３年
南　拓己	現代日本社会学科２年
73kg級	
細川拓弥	コミュニケーション学科３年
松田　拓	教育学科３年
81kg級	
加藤佑之介	コミュニケーション学科３年
大木雅人	教育学科１年
90kg級	
福井祥太	国文学科４年
伊藤光明	コミュニケーション学科２年
100kg級	
世古貴大	神道学科４年
花田健悟	教育学科２年
100kg超級	
栗村雅彦	教育学科２年
八幡大輝	現代日本社会学科１年

なぎなた競技で国体三位

薙刀部

十月十二日から二十二日にかけて開催された「長崎がんばらんば国体」に教育学科三年の堀井小春さん（薙刀三段）がなぎなた競技・成年女子の部に奈良県代表として出場。見事、成年女子演技で三位、団体試合で七位の成績を収めた。本学薙刀部に所属する堀井さんは昨年も国体に出場した実力の持ち主。今回の入賞については「顧問の福田啓子先生をはじめ多くの先生方や一緒に稽古を積み重ねた仲間のおかげで日頃の成果を発揮することができた」と謙虚な姿勢を貫く。さらに、「この結果に満足することなく、次の試合に向け精一杯頑張りたい」とも話し、来年の活躍を誓った。

来年への意気込みを語る堀井さん

三段跳びで十二位入賞

陸上競技部

二十歳未満の日本一を決める「日本ジュニア陸上競技選手権大会」の第三十回が瑞穂陸上競技場（名古屋市）で十月四日から六日にかけて開催され、教育学科一年の松葉大和君が男子三段跳に出場した。松葉君は十四メートル八十九センチの記録で十二位に入賞。数センチの差で八位入賞には届かなかったが、高い参加標準記録を突破した者だけが出場できるハイレベルな大会だけに、十二位入賞は見事といえよう。それでも、「今回の結果は自己記録に届かず、あまり満足していません。今後はさらに練習を積み重ね、日本選手権や全日本インカレに出場して優勝できるよう頑張りたい」と悔しさをにじませる松葉君。これからの活躍に注目だ。

悔しさをバネに雪辱誓う松葉君

濱岡君が県の最優秀投手賞＆ベストナイン賞受賞

硬式野球部

本学硬式野球部の投手濱岡健士君（現代日本社会学科三年）が平成二十六年度東海地区大学野球の三重県春季リーグで最優秀投手賞、同秋季リーグでベストナイン賞に選ばれた。

小学二年から野球を始めた濱岡君。急成長したのは大学に入ってから。きっかけは森本進監督の一言だった。「入部して最初に大学生の身体を作れと言われました」。以来、筋トレや走り込みに励み、今では一七一センチの身長に対し体重七十五キロ。高校時代に比べおよそ十キロ増えた。球速も十キロアップし、ストレートなら一四〇キロを超える。また、下半身が安定した分、制球力も上がり、緩急自在の投球術を身に付けた。そうした濱岡君の力投と堅い守りが功を奏し、春季リーグでは悲願の初優勝。部員たちは喜びに沸いた。

今後の目標について「来年の春季リーグで優勝して、次こそは全国大会に行きたい」と濱岡君。「いちばん大事なのはチームが勝つこと。個人タイトルは結果として取れたら嬉しい」とあくまでも部の一員として勝利をめざす。来春、どんな成長を見せてくれるか、楽しみだ。

「みんなのおかげで安心して投げられる」と濱岡君。モットーは「最少失点」

岡野友彦教授が科研費審査委員表彰受賞

国史学科の岡野友彦教授（研究開発推進センター長・神道博物館長）が平成二十六年度科研費審査委員の表彰を受けた。

科研費とは独立行政法人日本学術振興会が行っている科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）のこと。科研費は人文・社会科学や自然科学などすべての分野における基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的としており、厳正な審査を経て認められた独創的・先駆的な研究に対してのみ助成を行う。日本学術振興会では科研費の第一段審査（書面審査）において有意義な審査意見を付して公正公平な審査に貢献した審査委員を表彰しており、約五千三百名の第一段審査委員の中から岡野教授を含む一七〇名が表彰された。

第52回 皇高祭

9/18㊍・19㊎

テーマ●Happiness Charge

2日間にわたって開催された皇高祭。

1日目の吹奏楽部の演奏は生徒全員の心に響き渡り、会場が一つになった気がしました。一緒に歌ったり手拍子をしたり、わくわくがたくさん詰まったとても楽しい時間でした。奥田喜久男先生からは、笑顔のオーラの大切さ、生きる意義を学びました。死ぬとはどういうことか、生きるとはどういうことかを改めて考え直し、普段忘れている大切なことに気づかされました。アトラクションでは一龍斎貞橘さんの調子付の手拍子が会場に一体感を生みました。落語調の話し方を十分に聞き取れない部分もありましたが、説明を交えながらストーリーが進行したため、とても分かりやすかったです。一龍斎貞水さんの立体怪談では舞台のセットに思わず息をのみました。ライトで奇怪さを表現し、話に合わせて背景が変化するのが本当に恐ろしかったです。本物のお化けが登場した時は、女子の悲鳴が鳴り止みませんでした。

2日目のクラス展示は大変な盛り上がりを見せました。普段何気なく使う教室が鮮やかに彩られ、活気にあふれていました。どのクラスも個々の持ち味を十分に発揮し、みんなが楽しめる空間を作りあげていました。皇高祭で生まれたクラスの団結力を、これからの行事や普段の生活に活かしていきたいです。

「ハピネスチャージ～あなたにハッピーお届けデリバリー～」。今年の皇高祭目標には、自分自身が行事を思いきり楽しみ、そこから生まれたハッピーをみんなで共有し合おうという意味が含まれています。皆さんはハピネスを共有できましたか？

団結力を未来に活かしたい

総務副委員長　荒木美来

祭　典

厳粛な雰囲気で始まった「祭典」。参列者一同が頭を垂れ、お招きした神様に本年度の文化祭の意義を申し上げるとともに、学業成就への感謝の気持ちと、その成果をご奉告。そして、これから行われる文化祭の無事と、教職員・生徒一同が今後もますます元気で明るく勉学に励めるようにお祈りを捧げた。

書道部展示

各自でさまざまな書展に出品し、時には全員でパフォーマンス書道にも挑戦する書道部。皇高祭は日頃の成果を友人や先生方に直接見てもらえる舞台ということで、夏の校内練成会や県の合宿にも参加して作品を書き込み、掛軸や色紙を中心に40点あまりを展示。また選択書道1年生全員の扇子も同時に展示され、会場を盛り上げた。

吹奏楽部発表

昨年に続いて、東海吹奏楽コンクール金賞、三重県吹奏楽コンクール優勝を果たした吹奏楽部は、「バラの謝肉祭」「ピーターと狼」などの演奏に加え、ダンスなどのパフォーマンスも披露。全員の拍手と手拍子で、会場は大いに盛り上がった。部員にとっては、友人や後輩に晴れ舞台を見てもらえる嬉しい発表の場となった。

第35回 皇中祭

10/25㊏・26㊐

テーマ●輝く未来へ羽ばたこう ～148人の翼で～

みんなのサポートに感謝

総務委員長　志村日向

中学校最後の皇中祭が終わりました。今は爽やかな充実感でいっぱいです。

皇中祭では本当にたくさんのことを学びました。その中で一番心に残っているのは「仲間の大切さ」です。私は皇中祭に向けての準備や本番などで、総務委員長として全校生徒の前に何度も立ちました。自分が先頭に立って行動し、達成感を得ることができたのは、みんなのサポートがあったからです。

準備は夏休みから始まりました。皇中祭実行委員総勢25名で本番に向けアイディアを出し合い、全校生徒で楽しめるようにと工夫しました。行き詰まった時もありましたが、助け合って皇中祭に向け前進しました。その成果は各クラスの展示や合唱コンクールはもちろん、HONBUフェス（実行委員の発表）での高い評価に表れていたと思います。みんなで努力し、助け合いながら築き上げてきた皇中祭では、成功の喜びを身体全体で感じることができました。

本当に皇學館中学校の仲間に感謝です。ありがとうございました。

花・石鹸の販売・募金

2階のサンラウンジでは、鉢植えの花とデコパージュ石鹸の販売、赤い羽根共同募金活動が行われ、多くの来場者が足を止めていた。募金は伊勢市社会福祉協議会へ託され、また花とデコパージュ石鹸の収益金はエボラ出血熱救援金として寄付された。

クラス展示

宇宙旅行や星座を楽しむプラネットや、難問奇問に挑戦するクイズサプリ、皇學館の歴史を紐解くヒストリーハンターのほか、アニメ、ワールドカップミュージアム、演劇（赤ずきん＋不思議の国のアリス）など、各クラスが工夫を凝らした企画が目白押しであった。

合　唱

優勝クラスは3年B組。ユーモラスなクラス紹介から一転して本気の合唱モードに。表現力豊かな指揮とピアノの伴奏に合わせ、クラス全員が心を一つにした美しい歌声を会場に響かせた。課題曲「ハピネス」と自由曲「ありがとう」を歌い切り、6クラスで唯一の金賞を受賞した。

研究室探訪 vol. 22

川村一代ゼミ
文学部
コミュニケーション学科

会話を楽しむことで、英語力とコミュニケーション力を育てたい

今や英語は「話せて当然」の時代。そんな時代に、社会に出て役立つ実用的な英語力の習得をめざすのが、コミュニケーション学科の川村ゼミ。今回の研究室探訪では、英語が飛び交うゼミ室におじゃましました。

川村一代 准教授（実用英語）

ゼミの時間は研究室に入ってきた瞬間から終了のチャイムが鳴り終わるまで、オールイングリッシュです。まず互いに近況報告を行い、スピーキング力を養うと同時にゼミの仲間の日常を知ることにより絆を深めます。単語テストやリスニング練習に加え、その時々の話題を取り入れています。今年度は大ヒットした映画の主題歌「Let It Go」の歌詞を理解して歌ったり、17歳でノーベル平和賞を受賞したマララさんの国連でのスピーチを暗唱したりしました。ゼミ生が英検に受かった時はお祝い会と称してゲームを楽しんだりもします。もちろん英語のゲームです。

フィールドワークは毎年シンガポールに行き、10人以上に英語でインタビューをします。日頃養ってきた英語がどの程度通用するのか確かめながら、異文化を背景に持つ人たちとのコミュニケーションを英語で楽しみます。ゼミ生はこの体験を通して、自分の英語や自分自身に自信をつけ、さらなる英語学習への動機を高めるのです。

学生コメント

いつか字幕なしで洋画を観たい

松田明子さん　コミュニケーション学科4年

字幕なしで洋画を観られるようになりたくて、リスニングに力を入れている川村ゼミに入りました。川村先生はお母さんのように優しくて、私たち一人ひとりをとてもよく見ていてくださる先生です。就活がうまくいかなくて落ち込んでいた時も「あなたなら大丈夫!」と言葉をかけていただき、とても勇気づけられました。卒論のテーマは映画「となりのトトロ」です。オリジナルと英語版のセリフの比較から、日本語と英語の違いを明らかにするつもりです。

英語で話す楽しさを知った

武澤吉輝君　コミュニケーション学科4年

ゼミで最も印象に残っているのは、シンガポールのフィールドワークです。現地の人に英語でインタビューをするという課題が出て、僕は日本のサッカー選手の写真を何枚も用意して「この人を知ってますか？」と質問してまわりました。最初はすごく緊張しましたが、街の人が笑顔で会話に応じてくれて、次第に英語で会話をするのが楽しくなりました。卒業後はホテルへの就職が決定しています。将来、この経験が必ず活かせると信じています。

倉田山に笑顔が満ちた日

学園祭レポート

木々の葉が色づき始めると、いよいよ学園祭シーズンの到来！
友人と協力して遅くまで準備した時間も、そして学園祭の当日、たくさんの人に出会って
思い切り楽しんだ時間も、成長するための大切なステップ。
この日の倉田山には、学生や生徒はもちろん、保護者や教職員の笑顔であふれていた。

第53回 倉陵祭

10/31㊎～11/2㊐

テーマ●夢 想（ゆめおもう）

今は感謝の言葉でいっぱい

倉陵祭実行委員長　森　祥 央

大学生のうちに、今まで経験したことのないやりがいと楽しさを感じたい。そんな思いで実行委員長に立候補しました。

手探りで準備を進めることは、本当に大変でした。神宮や伊勢市役所、教育委員会にご挨拶に伺った時は、皇學館大生としての礼儀の大切さを身にしみて感じました。また準備を進める中でさまざまなイレギュラーが発生し、多くの学生や職員の方々に迷惑をかけてしまいました。それでも、自分なりに頑張って一つひとつの問題に対処してきたつもりです。アドバイスをくれた友人、大学の関係者の方々には本当に感謝しています。

今回の倉陵祭のテーマは「夢想(ゆめおもう)」です。学生だけでなく、来ていただいたお客様や教職員の一人ひとりが「こんなことをしたい」「こうなりたい」という夢を持っているはずです。倉陵祭で経験したこと、倉陵祭で見つけた出会い、そのすべてが、夢を叶えるきっかけになってほしい。そんな願いを込めて、このテーマを決めました。

終わってみれば、たくさんの人に助けられながら最後までやり遂げることができ、そして自分自身の「夢」をひとつ叶えることができました。今は、倉陵祭に関わってくれたみなさんに本当に感謝しています。

辛坊治郎氏 講演会

今年の講演会の講師は、テレビなどで大活躍のニュースキャスター・辛坊治郎氏。「時代を読み解く　正しい判断は正しい情報から ～辛坊治郎の冒険訓～」をテーマに、太平洋横断中に事故で漂流し、極限状態の中を海上自衛隊の救難飛行艇US-2に救助してもらった経験を臨場感たっぷりに紹介。日本の技術力の高さと、その技術力を活かすための情報力の大切さを説いた。約1時間半の間、笑いあり驚きあり感動ありのトークで、満員の会場を大いに盛り上げた。

屋内ステージ

総合体育館2階ではサークルやグループによる多彩なパフォーマンスが行われた。屋外とちがって音が響くため、演奏は迫力満点。人気グループが登場すると、客席は立ち見が出るほどの大盛況であった。

屋外ステージ

よさこい部〝雅〟の演舞で幕を開けた屋外ステージ。今年も吹奏楽団や邦楽部、雅楽部、軽音楽部(JAZZ)などの演奏や、ダンス、モノマネ、演歌、マジックのパフォーマンスなど、3日間にわたってユニークなステージが繰り広げられ、倉陵祭に華を添えた。

樽 神 輿

半世紀以上も続く、倉陵祭伝統の「樽神輿」。今年も牛車やお城、伊勢うどん、海賊船などをモチーフに手作りされた6基のユニークなお神輿が登場。屋外ステージでお披露目された後、「わっしょい！」の掛け声も勇ましく御幸道路を外宮まで巡行した。

ビブリオバトル

出場者が一冊の本を紹介し、来場者が「どれだけ読みたくなったか」を競うビブリオバトル。今年は教職員バトルと学生バトルの2本立て。2日目の学生バトルでは、コミックスあり、アール・ヌーヴォーの画集ありと、バラエティ豊かな戦いが繰り広げられた。

模 擬 店

大学祭の〝華〟といえば、やはり模擬店。今年も芝生広場や記念講堂前広場には多彩な模擬店が立ち並んだ。今年は「文科系の農業人」の養成をめざして本学が連携する三重県農業大学校が倉陵祭に出店。本学の学生たちが実習の中で育てたパンジーのほか、キュウリやミカン、お米などを販売し、好評だった。

着付け体験

祭式教室で神職の装束をつけて記念撮影できる、倉陵祭恒例の着付け体験。今年も時間帯によっては順番待ちの列ができたほどの大盛況。「神職の階位が高くなるほど、この部分を長く伸ばすんですよ」など、着付け担当の学生の説明を緊張した顔で聞きながら、体験者は初めての着付け体験を楽しんだ。

教育エキスポ

本学教育学会が、総合体育館のメインアリーナを使って日頃の研究成果を発表する教育エキスポ。単なるポスター発表にとどまらず、クイズや演劇、手遊びなど、趣向を凝らした演出で参加者にも楽しんでもらおうとするブースも多く、参加した教育学科の学生や、将来、教員をめざす高校生で賑わった。

展　示

周辺地域から発掘された貴重な遺物を数多く展示した考古学研究会や、領土問題に関するパネル展示を行った日本文化研究会、自作の歌集を配布した和歌同好会など、皇學館大学らしい展示が数多く見られた。

皇高 NEWS

有志生徒が清掃ボランティア

十月二十四日に有志生徒による皇學館周辺の清掃ボランティアが行われた。集まった約八十名の生徒はいくつかのグループに分かれ、一時間ほどの作業をこなした。以下に参加した生徒の感想を紹介する。

五十鈴川駅から本学までの通学路を清掃

ゴミ拾いを当たり前の行為に

二年九組　荒木美来

空が青く澄み渡った当日、私たちは五十鈴川駅をめざして歩を進めた。

普段、何気なく通る道でも、目を凝らすといたる所にタバコの吸殻や空き缶、傘、植木鉢などあらゆるゴミであふれていた。たった一キロほどの範囲だったが、どのグループもゴミ袋に穴が開くほどの量が集まった。

無事、最後までやり遂げることができたのは、地域の人から「頑張ってね」や「ありがとう」など励ましの声をいただいたおかげもあったと思う。しかし、後になって考えると、感謝されたことに妙な違和感を覚えた。自分の住む地域を美しくすることは当たり前の行動だと思うからだ。ゴミを拾う活動が珍しいものである限り、ゴミは減らない。なぜなら、それは私たち一人ひとりの環境保護に対する意識の低さとマナーの悪さの表れではないかと思うからだ。

ポイ捨てという言葉が一般化され、日々の生活に定着してしまっているのも一つの原因であろう。

清掃を終え綺麗になった通学路を歩くと、清々しい気持ちで学校に通える喜びを感じた。清掃活動に自主的に参加する生徒が増え、ゆくゆくはボランティアではなく、当たり前の行為としてゴミ拾いをすることが理想である。

全員で作り上げた体育祭

一言でいうと、今回の体育祭は本当に素晴らしいものになったと思う。

とくに印象に残っていることは二つ。一つ目は行進パフォーマンスだ。どのクラスからもやる気が伝わってきた。とくに二年生からは、「優勝してやるぞ！」という気迫がとても感じられた。二つ目は応援合戦。一年生も二年生も楽しく応援ができており、練習より遥かによい仕上がりになったと思う。だが、やはり三年生には敵わないと思ったのではないか。三年生はみんながハキハキとしていて、とても迫力があった。二十人リレーや四人×百メートルリレーも、走者一人ひとりから勝ちにいくという気持ちがひしひし感じられて本当によい戦いになった。

今回の体育祭は全校生徒の気持ちが一つになり、全員で作り上げ楽しむことができた。そのことを、総務委員長として心から嬉しく思う。

総務委員長　青木宏介

２年生による背中渡りリレー

三名が優良生徒表彰

第五十回三重県私学大会

十月十八日、津市の三重県総合文化センターにおいて第五十回三重県私学大会が開催され、皇學館高等学校三年の城貴斗君（前校友会総務委員長）と大畑綾音さん（前校友会総務副委員長）、皇學館中学校三年の志村日向君（校友会総務委員長）の三名が優良生徒として表彰を受けた。

城君は「優良生徒に選出されたことを心から光栄に、また、嬉しく思う。これを契機にさらなる飛躍をめざし、勉強や普段の生活を向上させていきたい」と話し、大畑さんは「このような賞をいただけたのは日々厳しく丁寧に指導してくださる担任の先生をはじめ、たくさんの先生方のおかげ。ほかの生徒の模範となれるよう、また社会へ出てからも恥ずかしくないように残りの高校生活を過ごしていきたいと思う」と喜びを語った。

校友会役員としてより良い学校生活や行事運営をめざし奮闘している三人。表彰されたことで、「今まで以上に身の引き締まる思い」と口を揃える。今後の成長が楽しみだ。

誇らしげな表情の３人。左から、志村君、大畑さん、城君

皇中 NEWS

本校の教育に多角的に迫る

第二回 オープンスクール開催

九月二十八日、今年度二回目となるオープンスクールを開催した。二回目のテーマは「皇學館を知ろう」。八月の第一回同様、昨年度を大きく上回る方々に来校いただいた。

今回は「皇學館教育の特長」を理解していただこうと、五教科の主任教員と在校生によるパネルトークを行った。各教科がめざす教育方針、六年一貫の効果的な先取りカリキュラムとその実施状況、来年度入試の展望と、さまざまな角度から本校の教育に迫ることができた。また、在校生に聞いた本校の「ここが凄い」をテーマにしたトークでは、「活気のある挨拶」「行事に取り組むやる気」「懇切丁寧な先生方の指導」など、実生活の中で体感した本校の特長が発表されるなど、実りあるものとなった。

さらに、国語、算数、英語の体験授業も行われ、各教室とも楽しく活気のある授業が繰り広げられた。

参加者アンケートでは「明日からでも通わせたい！と思った説明会でした」「勉強以外に挨拶や思いやりなども教えていたのが良いと思いました」「誠実な校風と感じられ、好感を持ちました」などの感想が寄せられた。

平成二十七年度入試が近づいてきた。今年度も多くの方の入学をお待ちしている。

中学生徒募集部

在校生が自身の体験から感じた本校の特長を発表

“初めて”を楽しんだ修学旅行

10月７日から10日にかけて、３泊４日の日程で北海道への修学旅行を実施した。参加した２年生353名の中には初めて北海道を訪れる生徒も多く、思い出深い旅になったようだ。以下に生徒の感想を掲げる。

観光名所・小樽運河の前でハイ、ポーズ！

またいつか……

二年三組　木村佳奈

四日間、たくさんの人にお世話になった。とくに先生方は一年以上も前から企画して下さり、感謝の気持ちでいっぱいだ。

飛行機に乗るのもジンギスカンを食べるのも初めてだった。また、みんなと食べるご飯は美味しく、みんなと寝るのも楽しく、本当に一日が早く感じた。私たちの高校生活一番の行事が終わってしまった。またいつか北海道に行きたいと思う。

この仲間とともに

二年九組　山口耀司

「楽しい修学旅行にしましょう」その言葉に心が躍った。三重を発ち、いざ北海道へ。

バスの車中、車窓から見える景色に思わず感嘆の念を抱いた。その自然の壮大さにますます実感が湧く。北海道へ来たのだと。車中は笑い声や驚きの声で少しざわめいていた。ここに住んでみたい。そう思ってしまうほど素晴らしかったからこそ、皆がいきいきとして見えたのかもしれない。

高校生活もあと一年と少し。この仲間となら楽しく過ごせそうだ。そう思えた旅行だった。

期待の高さ感じる参加者増

平成二十六年度 オープンスクール総括

今年度のオープンスクールは計三回実施された。例年になく多くの参加者があり、中でも八月三十一日に実施した「皇學館中学校・高等学校合同オープンスクール」はとくに参加者が多く、中高合わせて約千四百名（うち高校は約千二百名）が参加し、盛況のうちに幕を閉じた。続いて十月十八日に実施した第二回のオープンスクールでは二二〇名、また第三回も一四〇名の参加者があり、三回の合計で千五百名を超える参加者があった。昨年度と比較すると四百名ほど多い参加者となった。この増加率は、この地域の十五歳人口が減少していく中において、本校に対する興味と期待が高まっていることを示す数字といえよう。その分、日々の教育活動において、さらなる努力が必要ということでもある。

いよいよ入試本番を迎える時期となった。伊勢の本会場に加え、今年度からは津会場を設置し、津方面の受験生の利便性を高くした。今年度も多くの中学生の受験、そして入学を期待したい。

万雷の拍手を受けた吹奏楽部の演奏

地域に根付け レクぴよ活動

総勢一三七名（男子三十三名、女子一〇四名）の部員数を誇るレクリエーション部では、平成二十六年七月より月に一・二回、水曜日の昼間に明野児童館で「子育てサロン・レクぴよ」を開催している。目的は、子育て中のお母さんたちに交流の場を提供することと、普段あまり関わりのない〇歳～二歳といった乳幼児と触れ合い、部の活動の幅を広げるためだ。

「レクぴよ」で行われるのは手遊びや親子で楽しめる触れ合い遊び、大型絵本の歌い聞かせなど。季節によって夏祭りや運動会などのイベントも開き、お母さん方の交流の時間となるティータイムも設けている。「レクぴよ」の代表を務める国文学科三年の小濱菜央美さんは「活動を通して乳幼児の成長を間近で見られたり、初めてのおやつに立ち会ってお母さんと喜びを分かち合ったりと、子育ての楽しさを学ぶことができる」と話す。一方で、「子どもたちの成長段階に差があるので、みんなで楽しめる遊びを考えるのが難しい」と現場の苦労を吐露。しかし、音楽を使うと子どもたちの反応が良くなることに気付いたそうで、「歌や音を遊びに取り入れた結果、子どもにもお母さん方にも好評いただいた」と準備の大変さを上回る喜びや自信を得たようだ。

パネルシアターや紙人形を使って歌い聞かせる大型絵本など、幅広い年齢層が一緒に楽しめる工夫を凝らす「レクぴよ」のメンバーたち。準備は大変だが、子どもたちの喜ぶ顔が原動力だ

絵本に夢中の親子

回数を重ねるにつれアットホームな雰囲気になり、今では、「レクぴよ」の参加者が同部の他の活動に足を運んでくれることも増えたとか。小濱さんは「『レクぴよ』が地域に定着し、お母さん方、私たち双方にとって良い活動となるよう工夫と努力を重ねていきたい」と意気込みを語った。

消防署の協力得て 避難訓練

初めての水消火器体験に奮闘する学生

10月９日、Ⅳ講時終了後、学生・教職員を対象に避難訓練が行われた。地震に伴い火災が発生した想定でアナウンスが流れると、学生や教職員は一斉に９号館前の芝生広場へ避難。今回は伊勢市消防署職員の方にご協力いただき、本学教職員の誘導の仕方や消防署への電話通報、学生らの避難全般について確認及び講評をいただいた。また、消火器の使い方を体験できる水消火器を使用した訓練も行われ、学生約10名が挑戦した。

５号館から避難したという学生は「地震、火災が起こると想定した訓練でも避難に意外と時間がかかったので、実際に突然災害が発生した場合は落ち着いて行動することが大切だと思う」と語り、別の学生は「出入口に人が殺到するとほとんど動けないことがわかった」と感想を話していた。

中学生がキャンパスライフを満喫

総合学習の一環で大学生活を体験しようと、十月十七日に大台中学校三年の生徒二十九名が、同月二十一日に大王中学校一年の生徒五十四名が本学を訪れた。

大台中学校の生徒たちは簡単な本学の紹介を聞いた後、コミュニケーション学科の芳賀康朗教授による「心の不思議を体験しよう」をテーマにした模擬講義を受講。講義の中で芳賀教授が目に見えない心を探る手がかりとして表情、しぐさ、言葉などがあることや心の働きについて解説すると、うなずくなど熱心に話を聞いていた。また、左右や上下が反対に見える特殊なメガネを実際に使う実験では生徒から歓声や驚きの声が上がった。その後、保育実習室や研究室、総合体育館、芝生広場、図書館などを見学した生徒たちは学生食堂でランチを体験。中にはプリンやアイスクリームを楽しむ生徒も見られ、味やボリュームに満足した様子だった。

大王中学校の生徒たちは大学の紹介と大学生テレビ局の番組視聴を行った後、二組に分かれキャンパス内を見学した。九号館研究棟では大学教授の研究室を訪問。続いて、総合体育館、芝生広場、図書館、神道博物館などを回った。どの生徒も体育館の大きさやキャンパスの広さに驚いていた。神道博物館では学芸員の先生から神撰（神様へのお供え物）の模型を前に刺身の由来を興味深く聞いていた。

盛り上がった心理実験

生徒たちからは「大学は自分の夢を叶えるための大切な場所ということがわかった。将来は大学に進学しようと思う」「心理学に興味が湧いた。進路を考える際の参考にしたい」「僕もこういう大学生活を送りたいと思った」といった感想が寄せられ、体験を通じて本学を身近に感じ、自身の将来像を具体的にイメージできる有意義な時間を過ごしたようだ。

暁高校一年・高安さんが優勝！
第十五回 高校生英語スピーチコンテスト

文学部コミュニケーション学科では十月二十六日、三重県教育委員会・三重県高等学校英語教育研究会・公益財団法人日本英語検定協会・中日新聞社の後援を受け、「第十五回高校生英語スピーチコンテスト」を開催。今年度は十一校三十二名の参加となった。

同コンテストでは参加者はそれぞれ教科書や副読本などを題材に、あらかじめ提出したテーマ、原稿をもとに約三分間のスピーチを行う。どの参加者も大勢の聴衆を前に身振り手振りを付け堂々とスピーチしつつ、終了後は一様にほっとした表情を見せていた。

「Hamlet Soliloquy」と題するスピーチでみごと第一位となったのは、暁高校の高安麻香さんだ。「七月頃から練習を始め、学校ではALTの先生と休み時間や放課後に、家でも毎日練習した。自己流で発音してしまう癖があったので、辞書などで確実な発音記号を確認した」と高安さんは懸命に努力した日々を振り返った。「将来、海外へ行った時に流暢にコミュニケーションがとれる力を身につけたい」と今後の目標を語った。

運営にあたったコミュニケーション学科の豊住誠教授は「教科書や歴史に残るスピーチなど良質の英文の暗記は英語学習において非常に効果的。本大会が高校生の皆さんがグローバルな視野を養う一助になれば」と感想を述べた。

「練習の成果が実って本当に嬉しい。指導にあたってくださった先生に感謝したい」と話す高安さん（右から五人目）

入賞者（敬称略）

第一位	高安麻香	暁高校一年
第二位	木下くるみ	暁高校一年
第三位	今田翔子	高田高校二年

三重IPEの実践報告
利用者ニーズに応える社会福祉士をめざして

現代日本社会学部教授　守本友美

十月五日、本学において「三重IPEプログラム」が実施されました。IPEというのは、Interprofessional Educationの略で「多職種連携教育」や「専門職連携教育」と訳されています。一九六〇年代の英国における医学教育の取組みがその起源であり、わが国においても平成十二年前後からIPEを大学教育の教育課程に取り入れる大学が増加しています。背景には、個々の利用者の抱える問題が多様化・複雑化し、多職種の連携による援助が実現されなければ、利用者のニーズに十分対応できないという状況があります。

「三重IPEプログラム」は平成二十四年度に三重大学医学部の呼びかけによって始まったものです。医学・歯学・薬学・看護学・臨床心理学・社会福祉学を学ぶ学生がそれぞれの役割を認識し、お互いに理解を深め、将来の現場でスムーズに連携して協働できることをめざして、グループで協力して学習を進めていきます。具体的には、患者さんに関する情報を盛り込んだ「シナリオ」を使って、退院支援計画を作成し、発表・意見交換などを行います。「シナリオ」に描かれた患者を演じる「模擬患者」さんとの面接も含まれます。

現代日本社会学部社会福祉分野では、「社会福祉援助技術演習」の授業の一環として当初からこのプログラムに参加しています。医療専門職をめざす学生さんとの議論を通して、多職種が連携・協働するための知識と技術を習得するとともに、社会福祉士固有の視点や役割を再確認し、社会福祉士としてのアイデンティティを確立することをめざしています。

イベント情報（1～2月）

1月

10 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
『古事記』を読む（下巻）「欽明天皇」
白山芳太郎（文学部教授）

24 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
神道と仏教―神社仏閣に見る神仏習合と神仏分離―
「上野・寛永寺における神仏習合と神仏分離」
河野　訓（文学部教授）

2月

7 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
神道と仏教―神社仏閣に見る神仏習合と神仏分離―
「戸隠における神仏習合と神仏分離」
河野　訓（文学部教授）

14 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
1日・短期講習会「日本書紀を読む―景行天皇紀―」
大島信生（文学部教授）

14 土 皇學館大学 ふるさと講座　名張市武道交流館いきいき・多目的ホール
名張の言語調査　齋藤　平（文学部教授）

21 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
『古事記』を読む（下巻）「敏達天皇」
白山芳太郎（文学部教授）

28 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
1日・短期講習会「神道ことはじめ」
岡田芳幸（研究開発推進センター教授・学芸員）

◉各講座の詳細につきましては、**本学ホームページ**にてご確認いただきますようお願い致します。
◉**共催講座**（近鉄文化サロン阿倍野）のみ、**有料**です。お問い合わせは**近鉄文化サロン阿倍野**（☎0120-106-718）へお願い致します。
◉その他お問い合わせは、**皇學館大学地域連携推進室**（☎0596-22-8635）へお願い致します。

編集後記

今年で四年目を迎えた英国・ケント大学への短期留学の目的は語学研修と異文化交流。「リスニング力が伸び、帰国して市販の英語教材を聴いたら遅く感じた」との参加学生の声からも、その成長度合いがうかがえます。さらに、見知らぬ国でさまざまな人々と交流することで、「失敗を恐れず、前向きに」「自分から率先して行動」など、積極性も身に付いたようです。来春にはフィリピン、マレーシアでの短期海外語学研修のほか、上海での海外インターンシップが行われます。彼らは、「グローバル人材の育成」という本学の目標を実現してくれることでしょう。【企画部】

英国・ケント大学　夏季短期留学　参加者インタビュー

「語学力と積極性が身に付いた」

カンタベリー大聖堂でのフィールド・スタディ【8月5日】

英国・ケント大学への夏季短期留学に今年は二十二名が参加。八月二日から二十九日まで英国に滞在し、語学や文化の違いを学ぶ貴重なひとときを過ごした。今回は伊達成章君（教育学科二年）、塩崎幸さん（コミュニケーション学科一年）の二名に留学した感想を語ってもらった。

―留学しようと思った理由を教えてください。

伊達◆教員をめざしているので、子どもたちに外国の文化や英語の楽しさを伝えられるよう経験を積みたいと思い、参加しました。

塩崎◆生きた英語を学び、外国の文化や習慣を実際に体験してみたかったからです。

勉強になったと語る伊達君

―現地で受けた授業の感想は？

伊達◆研修最終日に行われた成果発表会の準備が大変でした。原稿や資料作りはもちろん、キャンパス内外の人々に対する英語でのアンケート調査に苦労しました。でも、このプレゼンテーションのおかげで英語が上達したと実感しています。

塩崎◆わたしも、プレゼンに多くの時間を費やしました。情報収集のために多くの人々にインタビューする必要があって。でも、断られるのを恐れず積極的に話しかけたことで、度胸がついたと思います。

貴重な経験ができたと塩崎さん

―留学中、印象に残ったことはありますか？

伊達◆スーパーのレジで「袋いりますか？」といった簡単な質問でさえわからず、落ち込みました。でも、一週間もすると聞き取れるようになったので、嬉しかったです。

塩崎◆ロンドンで観たミュージカル「オペラ座の怪人」でのオーケストラの生演奏、歌声がとても感動的でした。また、英国の人はプライベートの時間を大切にしていて、日本との違いを感じました。

リーズ城へのフィールド・トリップ【8月13日】

―留学前に比べ、成長したと思うことは何ですか。

塩崎◆リスニング力が向上したことと、コミュニケーション能力や積極性が増したことです。英語に限らず、何事に対しても失敗を恐れず、前向きに取り組む姿勢が大事だと思いました。

伊達◆僕もリスニング力が伸びたと思います。帰国して、市販の英語教材を聴いたら遅く感じたので。他に、とてもオープンになったと周りの人に言われます。自分から率先して行動することも増えました。

日本文化発信行事「Tastes of Japan」を開催【8月20日】

―同留学への参加を検討している学生に対して、メッセージをお願いします。

塩崎◆英国での一カ月は光陰矢の如しで、もう一度行きたいと思えるほど有意義な時間でした。参加すれば、日本では得られないものを会得することができます。必ず自分にとってプラスになると思うので、ぜひ参加することをおすすめします。

伊達◆留学したことで、もっと話せるようになりたいと意欲が湧いてきたし、何よりも、英語がより好きになり、もう一度海外に行きたいという気持ちになりました。人生の貴重な経験になること間違いなしですので、勇気を出して留学への扉を開いてみてください。

自立心と協調性を両立させた学生たち

コミュニケーション学科教授　児玉玲子

グローバルな人材育成が必要とされる昨今、グローバルな視点の必要性を感じているのは、若者たちであろう。「世界を見たい」「英語力を身につけたい」という願いを抱き、今年も二十二名の学生がケント大学での夏季短期留学に参加した。

ケント大学は、カンタベリー大聖堂を見下ろす小高い丘に位置し、学生たちは日々、優美で荘厳な大聖堂を見ながらクラスまで通い、午前九時から午後三時半まで語学研修を受けた。学生たちは、この大聖堂のある城壁に囲まれた街がすぐに好きになる。今年も授業が終わると街へ出かけ、博物館見学や散策を楽しんでいた。

ケント大学との協定は今年で四年目に突入した。語学研修プログラムは基礎から実践的な内容までを幅広く網羅し、また学生に対するサポートやアクティビティは年々いろいろ工夫されている。今年は、ケント大学の学部生がアンバサダーとして参画。クリケット等の英国固有のスポーツ、ハイティー（軽食つきのお茶）、英語でのカラオケ大会等、英国文化を楽しむ機会を多く提供してくれた。

恒例となったTastes of Japan（日本文化発信行事）は今年もまた大盛況であった。留学前の企画会議、現地では限られた時間の中で練習や準備をし、いよいよ本番。まず「世界に一つだけの花」を全員で合唱し、次に阿波踊り、書道、茶道、折り紙、そして団扇作りを体験してもらった。来場者は百名を超え、文化発信に加え、さまざまな国・人種を越えての異文化交流を楽しんだ一時であった。こうしてクラスの内外で英語に触れ、研修最後に課せられたプレゼンテーションでは、短期間で身につけた英語力とパフォーマンス力、そして〝度胸〟を披露した。

英国を離れる前日、学生全員でLondon Eye（観覧車）に乗り、それぞれの日々を振り返ったと聞いている。自立心と協調性――留学期間中にこれらを併せ持ってほしいと願っていたが、それらを両立させた学生たちであった。英語が話せるからこそ可能となるコミュニケーションの楽しさも体験できたであろう。語学学習には終わりがない。これからも是非、英語に触れ続けてほしいと願う。

シンガポールより大学生訪日団が来学

シンガポールの大学生訪日団が十一月十三日、日本政府の「JENESYS 2.0プログラム・二十一世紀東アジア青少年大交流計画」の一環で本学を訪れ、学生及び近隣市民ら約百名との異文化交流を行った。大学生二十三名とスタッフ三名の計二十六名の訪日団は、昼食会の後、書道体験や神道博物館見学等を行い、日本の伝統文化について学んだ。

夕刻から「百船（ももふね）」で、よさこい部〝雅（みやび）〟の演舞を楽しんだ後、国際交流を目的とした学内有志サークル「GIP（ジップ）」（Global Interaction Party）主導のもと、英語によるワークショップで参加者との交流を深めた。

学生スタッフの国文学科四年・宮路夏実さんは、「本学には留学生が少なく、今回のような国際交流の機会が定期的にあるとよい。久しぶりに英語を使ったが、今後、日常的に英語に触れる習慣を増やしていきたい」と話していた。

学芸員の説明に熱心に耳を傾ける訪日団一行（神道博物館）

皇學館ミュージアム

役者絵　中村芝翫（なかむらしかん）舌出し三番叟（さんばそう）

1枚
縦 37.5糎　横 26.3糎
江戸時代

浮世絵から紐解く歌舞伎

中村芝翫演ずる「舌出し三番叟」主名題「再春菘種蒔（またるるはるすずなのたねまき）」という所作事（しょさごと）を描いた浮世絵です。三番叟は正月の定番演目（じょうばんえんもく）で、歌舞伎舞踊の一系統を占める儀式舞踊（ぶよう）です。所作事とは時代物・世話物両方の内容を含みつつ、舞踏仕立てとした演目です。役者が舌を出す振り付けのためこの名があります。文化九年（一八一二）江戸 中村座で初演、洒脱（しゃだつ）で格調ある名作で、三番叟系舞踊の代表作です。役者は二代目中村芝翫、上演時期は、文政九年（一八二六）の江戸表より上方に出向く御名残狂言（おなごりきょうげん）の演目と思われます。浮世絵の筆者は五渡亭国定（とよくに）（三世豊国）です。

（千束屋（ちづかや）伊勢歌舞伎資料のうち）

佐川記念神道博物館教授・学芸員　岡田芳幸